

氏 名：阿 部 利 恵

学 位 の 種 類：博士（看護学）

学 位 記 番 号：甲 第 6 8 号

学位授与年月日：平成 2 8 年 9 月 2 7 日

学位授与の要件：学位規則第 4 条第 1 項該当

論 文 題 目：終末期ケアに携わる透析スタッフのためのピアサポートの展
開とその意味：アクションリサーチを通して

THE CHANGING PROCESS OF THE PEER SUPPORT
FOR DIALYSIS STAFF ENGAGE IN END-OF-LIFE
CARE : ACTION RESEARCH IN THE DIALYSIS
FACILITY

論文審査委員：主査 守 田 美奈子

副査 本 庄 恵 子（正研究指導教員）

副査 吉 田 みつ子（副研究指導教員）

副査 鶴 田 恵 子

副査 田 中 孝 美

論 文 内 容 の 要 旨

【研究の背景】

医療技術の飛躍的な向上により長期透析や高齢者の透析導入が可能となった現在、透析患者の終末期医療では、透析中止や事前指示書を含めた多くの議論がなされるようになった。2014 年には日本透析医学会から「維持血液透析の開始と継続に関する意思決定プロセスについての提言」が公表されたが、医療者と透析患者・家族が透析医療の現場で死を直視した話し合いの機会を持つことは未だに少ない現状にある。加えて、透析医療に携わる医療者間においても、透析患者の終末期ケアに関する話し合いの不足が報告されており、それぞれに難しさを抱えている。また、透析医療においては看護職者に加え、臨床工学技士も医療機器の管理にとどまらず透析患者にかかわっており、今後、協働していく機会が増えることが予測される。

【研究の目的】

透析医療の終末期ケアにおけるピアサポート「終末期ケアを語る会」を展開し、その実践的意味を参加者の変化から明らかにすることを目的とした。

具体的には、①透析患者の終末期ケアをめぐる自分の気持ちや課題に気づいていく様子や課題への対応についての変化、②参加者同士で語り合う中で、どのような関係が作られるのかというグループダイナミクスの変化、③透析患者の終末期ケアの課題への対応についてどのような組織的な変化が生じるのかに焦点を当てた。

【研究方法】

- (1) **研究デザイン**: アクションリサーチ。変化 (change)、参加 (participation)、活動 (action) を念頭におきながら、Morton-Cooper (2000/2005) を参考に「問題の明確化」と「可能な解決策を探るための協働的介入」の2要素に留意し研究を進めた。本研究では「終末期ケアを語る会」の展開を通して、そこに参加する個人の変化や透析スタッフのグループとしての変化をとらえた。
- (2) **研究参加者**: 研究協力施設で患者とかかわる透析スタッフ (看護師・准看護師・臨床工学技士) のうち、研究参加に同意を得た看護師 11 名、准看護師 7 名、臨床工学技士 2 名の合計 20 名であった。
- (3) **「終末期ケアを語る会」の実施とデータ収集方法**: 「終末期ケアを語る会」は、1 回 45 分程度とし、月に 1～2 回のペースで合計 16 回行った。研究者は、ファシリテーターとして「終末期ケアを語る会」に参加した。データは、①参加観察によるフィールドノーツ、②「終末期ケアを語る会」の内容、③個別インタビューから収集した。
- (4) **データ分析方法**: 「終末期ケアを語る会」と個別インタビューの逐語録およびフィールドノーツは、指導教員にスーパーヴィジョンを受けながら、透析患者に対する終末期ケアの経験にかかわる内容に焦点をあて、研究目的に沿った視点で継続的に質的な分析を行った。
- (5) **倫理的配慮**: 日本赤十字看護大学研究倫理審査委員会の承認を得て研究を実施した。

【研究結果】

以下の5つの局面が見出された。

(1) 自分の気持ちや考えを話す機会のない日常に気付く

参加者は、「終末期ケアを語る会」に参加して、透析患者の死をめぐる経験について安心して自由に語るうちに、職場の中ではこれまでなかなか自分の気持ちや考えを話せていなかったことに気付いていった。

(2) 事前指示書の取り組みの難しさから日常的なかかわりの大切さに気付く

参加者は、事前指示書的话题をきっかけに、死をイメージしやすい「事前指示書の取り組みで経験している患者・家族とのかかわりの難しさ」や、その指示内容だけでは判断が難しい「透析中の救命は最優先という原則に対する疑問」について語り合っていた。このような難しさを共有する中で、「透析患者との日常的な会話の中で死に関する思いを知る」ことから終末期ケアを考えることができるのではないかと気づき、日常的な会話の大切さを参加者間で確認し合っていた。

(3) 透析患者の死を見据えたケアにおける感情を吐露し共有する

死を見据えたケアの慣例 (受け持ち担当スタッフが臨床工学技士から看護職者になること) や透析の差し控えに関する事など、透析患者の死を見据えたケアをめぐる感情を吐露し、それを参加者が受け止めながら互いの思いを共有するという変化が起こっていた。例えば、死期が近い患者のケアに関して、臨床工学技士が抱く疎外感や無力感、受け持ち担当スタッフ 1 人にケアが一任される難しさなどを共有していた。

(4) これまでの慣例を超えて支えあう組織へと変化する

臨床工学技士が最期に向けたケアにかかわりたいという意思をもっていることを知った看護職者が臨床工学技士と相談し、「臨床工学技士と看護職者が連携する終末期ケア体制への変化」という本研究協力施設では初めての試みとなる変化が生じた。このことがスタッフに周知され、受け持ち担当スタッフに一任されがちであった終末期ケアを透析スタッフで相談し合い、受け持ち担当スタッフを支えるという「透析スタッフ全体で支え合う終末期ケアの展開」がなされるようになった。

（５）透析患者の終末期ケアについて相談し合う場を自分たちで続けようと模索する

終末期にある透析患者・家族と医師および透析スタッフ間で終末期の方針について共に考えることの必要性についての気づきを共有しようとする中で、「終末期ケアの検討に医師を巻き込もうとする」変化へと発展した。そして、「終末期ケアを語る会」のような場を、本研究終了後も自分たちで続けていこうという模索が始まっていた。

【考察】

「終末期ケアを語る会」の開催を通して、研究参加者は日常的な関わりが大切であること、すなわち、日常的なケアの延長線上に終末期ケアがあることに気づいていった。死期が迫った時期に事前指示書の記入を求めるような方法ではなく、日常的な会話の中から見えてくる透析患者の「どのように生きたいか」という希望をくみ取ることの方が、患者にとっても透析スタッフにとっても困難感がない方法である。日常の会話の中から患者の意向を組みとることは、死ぬことに焦点をあてるのではなく生きることに焦点をあてた終末期ケアといえる。すなわち、終末期ケアを、いかにその人らしく生ききるかという、人生全体を見据えたエンド・オブ・ライフケアとして位置づけることの重要性が示唆された。

透析患者の終末期ケアの検討に際しては、透析の見合わせを含め、透析患者の死を左右するような、医療者も感情を揺り動かされる課題に直面せざるを得ない。このような正解の見えない課題に直面する医療者にとって、感情レベルでの共有が可能となる安心して語り合える場は、透析患者や家族にとっての最善を目指す終末期ケアを実践するうえでの基盤となるといえる。本研究での「終末期ケアを語る会」のように、感情の吐露と共有が可能となる“安心して語り合える場”を基盤として生じた先入観を超えて相互理解にたどり着くプロセスは、医療者間における合意形成に至るための初めのプロセスとして位置づけられると考える。

また、感情の吐露と共有から始まった合意形成は、これまでの組織における固定的な慣例で限定されていた役割を乗り越え、臨床工学技士と看護職者の協働による終末期ケアという新たなケアの自律性を自分たち自身で獲得することにつながっていた。“安心して語り合える場”を組織の中で育むことは、組織の中で透析スタッフ一人ひとりをエンパワメントすることとなり、固定化された組織から主体的なケアを協働で実践する組織へと変化させることの可能性が示唆された。

さらに、研究の後半で生じた、透析患者の終末期ケアについて相談し合う場を自分たちで続けようと模索し、そこに医師を巻き込もうとする変化は、医師の指示のもとに実践する業務中心の組織から、透析患者のケアを医師と共に相談し合いながら主体的なケアを協働で実践する組織への変化として捉えることができる。このような変化は、透析医療における新たなチーム医療を検討する一助になると考える。

論文審査の結果の要旨

超高齢社会を迎えた現在、透析患者が受ける透析療法期間は長期化し、透析患者の終末期ケアについての取り組みへの期待が高まっている。

本研究は、透析患者の死をめぐるケアについて語りあうことがない現状を課題としてとらえ、透析導入直後から長期にわたり患者が通ってくる透析施設において「終末期ケアを語る会」を立ち上げ検討する意欲的な取り組みである。看護職者と臨床工学技士を透析スタッフとして位置付けた本研究成果は、臨床工学技士という新たな職種と看護職者の協働についての重要な知見となると考える。

本研究で示唆された「日常的なケアの延長線上にある終末期ケア」は、事前指示書の作成に困難を抱える多くのスタッフに実践的な示唆を与えるだけでなく、定期的かつ長期にわたる支援を行う透析施設での終末期ケアへの新たな知見を提供するものといえる。また、「終末期ケアを語る会」のように、感情の吐露と共有が可能となる“安心して語り合える場”は、感情を揺り動かされる課題に直面する透析スタッフの合意形成の基盤となることや、さらには、主体的な実践ができる組織への変革につながることが示唆された。この実践的な示唆は、多くの困難を抱える透析施設のみならず、終末期ケアの倫理的課題に直面する医療の現場に示唆をあたえるものである。尚、論文題目は、内容をより反映させた題目に変更することとした。

本博士学位論文審査会では、学位規程第3条により、審査の結果、博士（看護学）の学位論文として「合格」と判定した。その後、最終試験を行い、「合格」と認めた。